



謝村に牧の馬を守る武士儀間がおり、狩りに訪れた在番使川上右京の乗った暴れ馬を怪力で取押えた功績から儀間右京の号を与えられ、右京登之親雲上を名乗った記事がみえます。

『琉球』附巻尚貞王附条には比謝村に牧の馬を守る武士儀間がおり、狩りに訪れた在番使川上右京の乗った暴れ馬を怪力で取押えた功績から儀間右京の号を与えられ、右京登之親雲上を名乗った記事がみえます。



比謝

プロフィール

比謝は、古い集落で、以前は比謝橋の北側の位置にありましたが、比謝川の氾濫のため水害を多く受け、尚瀬王の代（一八〇四〜三四年）に大湾村の北側の芭蕉畑であった現在地に集落を移したと伝えられています。比謝の語源は東の意で、読谷村の東にあることからこの地名が付いたとされています。『絵図郷村帳』（一六四六年）には「ひじや村」と見えますが、『琉球国高究帳』（一七世紀中頃）・『琉球国由来記』（一七三一年）には村名や拜所ともに見えませんが、『琉球国旧記』（一七三一年）には村名が記されています。『琉球国由来記』（一七三一年）では「牧」の項に「読谷山間切比謝」をあげ、牧がいつからあるかはわからないが、天智天皇七年（六八八）に近江国に牧が多く置かれたことを紹介しています。この牧は首里王府直営の牧場で約二六町六反六畝ありました（明治一六年十二月十五日付沖庶甲第一号「牧場処分之儀二付上申」）。



比謝エイサー



比謝まつり

地元の比謝では、この儀間のことを比謝右京と呼んで今に伝えています。沖繩戦後、国道東側を軍用地に接収されましたが、ほぼ元の集落に復帰でき、住民の協力でも復興しました。隣接して渡具知の人達が集団居住し、北側地域にも転入者が多く居住しています。公民館や村道、排水路、公園などが整備され、また県営比謝団地の建設にともない転入人口が増加しています。

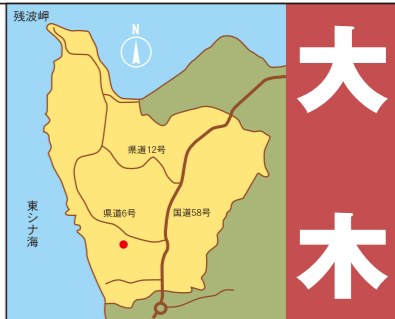
地元の比謝では、この儀間のことを比謝右京と呼んで今に伝えています。

佐久川イモ発祥の地

一八五〇年、比謝に生まれた佐久川清助氏は甘蔗の新品種を一八九二年に選抜育種しました。この佐久川イモは明治末期から昭和にかけて主要品種として沖繩の農業発展に貢献しました。一九六九年この功績により日本農林漁業振興会において農林大臣より顕彰されました。そのことを記念して「佐久川イモの発祥地」碑が建立されました。二〇〇二年に佐久川清助生誕一五〇年記念事業の一環として拜所整備とともに碑の再建立がなされました。



「佐久川イモ発祥の地」碑とお宮



大木

プロフィール

大木は、一九三五年に伊良皆・比謝・楚辺の屋取集落六一戸が集まってできた比較的新しい集落です。復帰前には、比嘉秀平初代琉球政府主席を輩出しています。集落形態は散村でしたが、ほかの地域からの転入も増えて今の密集した居住地となっています。現在、「読谷道路」整備事業が着手されており、大木地区の中央を走ることから地区の姿が大きく変わろうとしています。

この「読谷道路」整備によって広域交通へ流れが移行し、県道六号線との交差点は、読谷村の新しい玄関口となります。県道六号線沿いの開発整備及び商業・サービス施設の立地の誘導、並びに「読谷道路」沿道にふさわしい土地利用の推進により、読谷村の新しい玄関口が形成されることでしょう。「読谷道路」の整備に伴い、県道六号線沿及び、その北側の軍用地の土地利用が重要となります。計画的な開発整備により、拠点的な商業・サービス機能の導入を図るとともに、地域では花いっぱい運動を推進し、一九九八年には全国みどりの愛護功労で建設大臣賞を受賞するなど、街並みづくりと併せて読谷村の新しい玄関づくりを推進しています。



沖繩の戦後復興に貢献した比嘉秀平氏

一九〇一年生まれ。読谷村間切大木出身。貧しい農家に育った比嘉氏は小学生の頃サトウキビ圧搾機で右腕を失う事故にあいました。その後奮起して早稲田大学に進学、英語を専攻、教員を経て、沖繩民政府翻訳課長を皮切りに官房長などを歴任。全琉統合政府の設立に重要な役割を果たしました。一九五二年琉球政府初代行政主席に就任。軍用地問題解決に向け東奔西走するなど戦後復興に貢献しました。

名誉村民 比嘉 秀平氏
1901年6月7日生
1956年10月25日没

